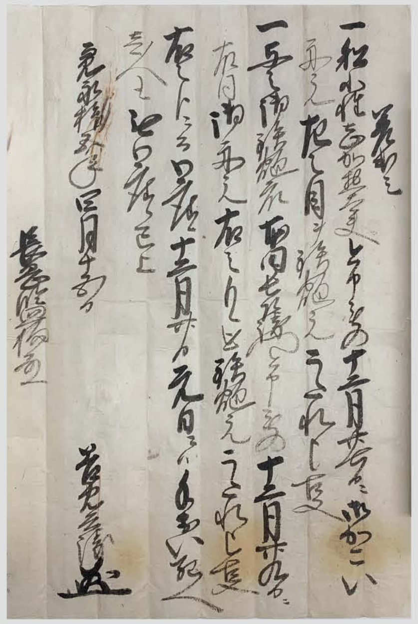
第１章　島原・天草一揆の記録と排耶書の出現

寛永 14 年（1637）年、肥前国島原半島南部高来郡において、厳しい年貢の取り立てやキリシタンへの取り締まりに反発した人々により、島原・天草一揆が勃発した。

一揆の終盤、一揆勢約３万７千人は原城（長崎県南島原市）に籠城し、幕府軍は総勢 12 万人でその鎮圧にあたった。約３ヶ月に及ぶ籠城戦の末、一揆勢は幕府軍に敗れた。

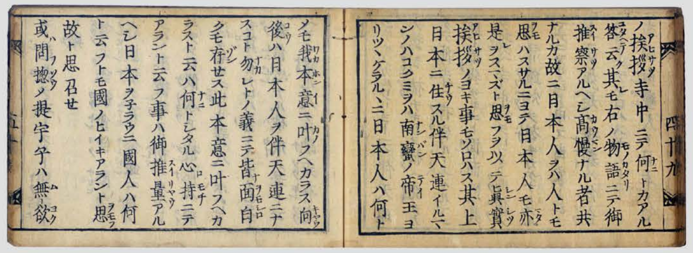
一揆終息後、キリシタンへの取り締まりは一層厳しくなり、キリスト教の教えに批判的意見を加えた「排耶書」が次々に刊行された。また、鎮圧にあたった藩士などにより一揆の記録もつくられた。

本章では、一揆に関わった人物らによる記録と、一揆の直後に刊行された排耶書について紹介する。



島原・天草一揆に参加した谷忠兵衛が、熊本藩の家老長岡監物に宛てた書状で、一揆における家臣の死傷状況を報告しています。一揆の生々しい様子がうかがえます。

「谷忠兵衛書状」＊
寛永 15（1638）年４月 15 日 / 谷忠兵衛（差出）/ 紙本墨書 / 安高啓明研究室（熊本大学）蔵



『破提宇子』＊
元和 6（1620）年 / ハビアン著 / 紙本木版、小横帳 / 京都大学附属図書館蔵

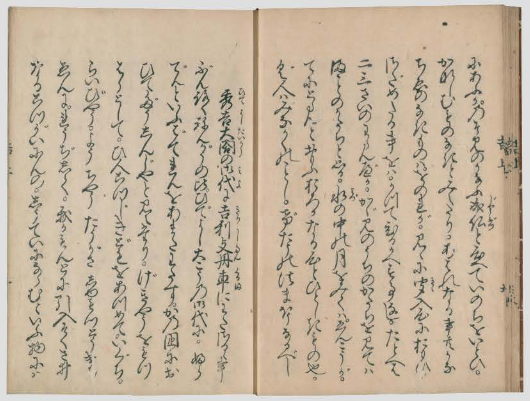
ハビアンは優れた日本人イルマン（修道士）でしたが、次第にキリスト教の教えに疑問を抱くようになり、ついに棄教します。『破提宇子』はハビアンによる排耶書で、さまざまな視点からキリスト教の教えや外国人宣教師を批判しています。

＊パネルによる参考展示資料（以下同）

第２章　実録の流行とキリシタン実録群

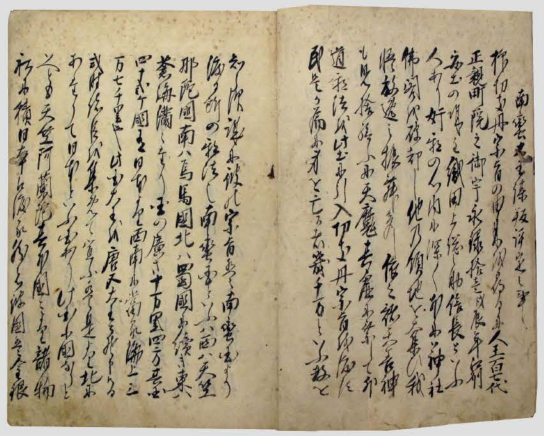
江戸時代中頃になると、人々のキリシタンに対する認識は薄れていったが、写本として広まった「実録」のなかに、キリシタンを題材としたもの（「キリシタン実録群」）が現れたことにより、実際とは異なるキリシタンイメージが成形されていた。またキリシタン実録群は、キリシタン自体が禁忌的題材であったことや、当時はほとんど知ることができなかった西洋に関する記述があったことから、人々の興味を引くものでもあった。

本章では、排耶書から「キリシタン実録群」への変化の過程をたどり、その内容を紹介し、禁教期の人々が持っていたキリシタンイメージに迫る。

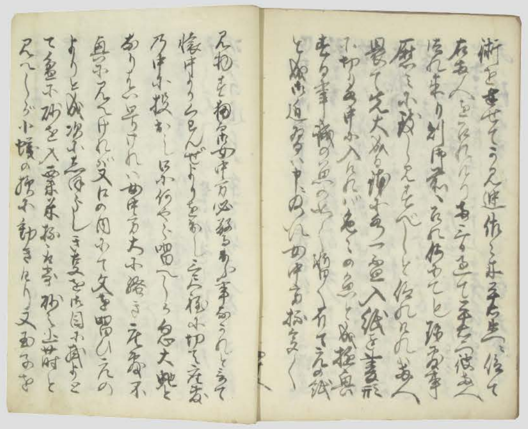


仮名草子として出版された排耶書です。他の排耶書と比べてストーリー性があり、平易な仮名書きとなっています。寛文５（1664）年には挿絵が追加され、『吉利支丹退治物語』として出版されました。バテレン（宣教師）は、天狗のような姿で描写され、鼻が高い・目が大きい・爪が長いなどの特徴が記されています。

『吉利支丹物語』＊
寛永 16（1639）年 / 作者不明 / 紙本木版、竪帳 / 国立国会図書館蔵（国立国会図書館デジタルコレクションより）



『切支丹由来実録』
安永４（1775）年 / 西脇吉蔵〔写〕/ 紙本墨書、竪帳 / 西南学院大学博物館蔵



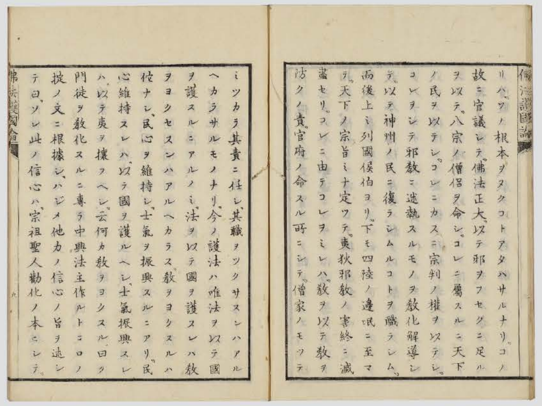
『切支丹宗門来朝実記』
寛政 10（1798）年 / 沙門賢盛〔写〕/ 紙本墨書、竪帳 / 西南学院大学博物館蔵

「実録」は、主に貸本屋を通して人々に読まれました。実録のテーマは、加賀騒動・黒田騒動などのいわゆる「お家騒動」を題材としたものや、関ヶ原の戦いや島原・天草一揆などを題材とした軍記物、皿屋敷（お菊）などの怪談など、多岐にわたります。実録のテーマの一つに「キリシタン渡来」に関するものがあり、それらは『吉利支丹物語』のストーリーを引き継ぎつつ、虚構などを交えながら具体的に話を膨らませたものです。たとえば、「南蛮国王」らがキリシタンの術を使って日本を占領しようと話し合う場面や、「ゴウスモウ」・「シュモン」という日本人修道士が豊臣秀吉の前で魔術を使う場面などが追加されています。

第３章　明治以後の排耶書とキリシタンブーム

幕末から明治初頭にかけて、神道の国教化がすすみ、仏教界は打撃を受けた。そこで、「破邪顕正（邪教を打ち破り正しい教えをあらわすこと）」を目標に掲げ、復興をめざそうとした仏僧による排耶書が次々と著された。明治 39（1906）年には、キリシタンの信仰具や踏絵などの「耶蘇教遺物」が東京帝室博物館の特別展で公開され、キリシタンの存在が注目されるようになる。そして昭和時代にかけて、キリシタンが使用していたとされる「キリシタン遺物」がつくられ、流通していった。

本章では、仏僧による排耶書や、明治時代以後につくられた「キリシタン遺物」を紹介し、幕末から明治時代以降のキリシタンイメージの変化をたどっていく。



『仏法護国論』＊
安政３（1856）年 / 月性〔撰〕/ 紙本木版 / 京都大学附属図書館蔵

浄土真宗本願寺派の僧・月性により著された排耶書です。仏教界の中でも特に、東西本願寺が積極的に説諭活動を行っていました。このころに仏僧により著された排耶書の書名にはしばしば「護法」「護国」という言葉が入っています。

キリシタン仏像
昭和 20（1945）～昭和 25（1950）年か / 作者不明 / 鉄製 / 西南学院大学博物館蔵

十字架の中心に仏像がついており、「キリシタン遺物」とされていました。しかしながら実際は、昭和 20（1945）年前後に愛知県で製作されたもので、つくられた「キリシタン遺物」の一つです。明治時代以後、このようなキリシタン「らしい」ものが沢山つくられ、国内外に流布しています。